

S-II-3

性格・心理テストによる証の解析

富山医科薬科大学 和漢薬研究所 漢方診断学部門

○喜多敏明

【目的】証とは精神・身体機能の歪みを漢方医学独自の概念と理論によって定義した実用的な病態モデルであるが、漢方医学が認識している証というものを現代医学的に解明されている病態メカニズムによって理解することが証の客観化には必要である。その前段階として、ストレッサーによる精神機能の歪みを心理テストや性格テストを利用して客観的に評価し、証の心理的側面との関係を検討する一連の研究を行ってきたので報告する。

【対象と方法】対象は随証治療が有効であった不定愁訴患者とし、ある方剤が有効であったという結果からその患者の証（～湯証，～散証）を判定した。不定愁訴患者で問題となる精神機能の歪みと、証の心理的側面との関係を検討するためには不安や抑うつだけでなく、他の陰性感情や性格特性にも注目する必要があると考えた。そこで、C M I 健康調査表の精神的愁訴（不適応・不安・怒り・抑うつ・過敏・恐れ）と、16 P F 人格検査の情感の性格特性（打ち解けないー打ち解ける）を利用した。

【結果】C M I を利用した検討から、加味逍遙散証と抑肝散加陳皮半夏証の心理的側面には過敏や怒りが強く関係し、恐れや抑うつとの関係は弱いということが示された。それに対して、柴胡加竜骨牡蛎湯証の心理的側面には恐れや抑うつが強く関係することが示された。

16 P F 人格検査を利用した検討から、抑肝散加陳皮半夏証・柴胡桂枝乾姜湯証・荊芥連翹湯証の心理的側面には打ち解けない性格特性（嫌いな相手が近づいてくることをストレスと評価し、回避指向の対処行動を選択し、嫌悪感情を喚起する）が強く関係し、加味逍遙散証・半夏厚朴湯証・加味帰脾湯証の心理的側面には打ち解ける性格特性（好きな相手が離れていくことをストレスと評価し、接近指向の対処行動を選択し、悲哀感情を喚起する）が強く関係することが示された。

【考察・結論】心理状態や性格特性の違いが証の心理的側面と密接に関係していることが示唆された。今後、陰性感情やストレス過程の病態メカニズムを現代医学的に解明することが、証の心理的側面を客観化することにつながるものと期待できる。